

おおさき

大崎遺跡(本発掘調査B)

所在地 北設楽郡設楽町田口字大崎
(北緯35度06分22秒 東経137度33分50秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和3年7月～令和4年2月

調査面積 8,100㎡

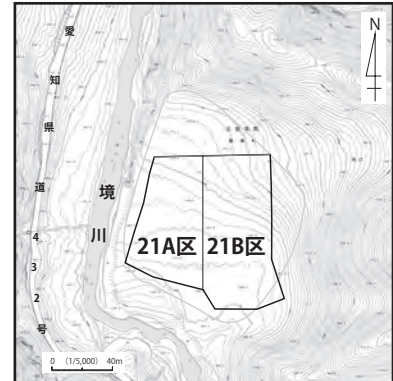
担当者 樋上 昇・川添和暁・渡邊 峻・河嶋優輝・
社本有弥・酒井俊彦・宮腰健司



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は、遺跡範囲の中央から南端に向かっての8,100㎡が設定され、便宜的に西側をA区・東側をB区とした。

立地と環境 遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地し、標高365m～377mである。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。北東側はこれら尾根に挟まれた谷地形で、湧水などのためか、調査前までは湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地で、遺跡中央付近で傾斜の変換点があり、傾斜角度がさらに緩やかとなり南側へと続く。境川は西側からクランクして遺跡の南側を東流し、この付近では、遺跡との比高差が約8mと最も小さい。

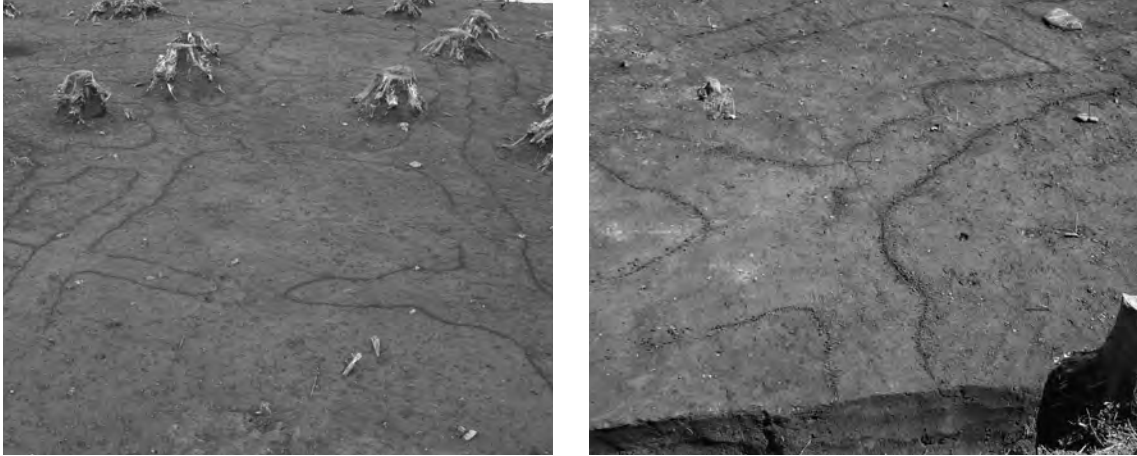


大崎遺跡範囲と調査区位置

調査の概要 層序は、I層：表土・腐植土(約10cm)、II層：灰黄褐色粘土層など(20～40cmほど)、III層：にぶい黄褐色粘土・シルト層(20～50cmほど)、IV：黒色粘土・シルト層(約30cm)、V層：明黄褐色粘土・シルト・砂・砂礫層である。II層は古い段階の耕作土および遺物包含層、III層上面が縄文時代中期以降の遺構検出面である。V層が片麻岩由来の岩盤層あるいは旧境川河床由来の堆積層である。IV層の形成時期は不詳であるが、特に片麻岩由来の風化細礫を包含する層は、よりV層に近いと考えられる。

今年度の調査で確認された遺構・遺物は、以下の通りである。

時代・時期	検出・出土層	遺構(基数)	遺物
近世以降	I層、III層上面	集石遺構(5) 木炭窯(1)	陶器片?
戦国期～近世	II層中およびIII層上面	ピット列(1)・一部の 水田関連遺構	陶器片
中世前半		水田関連遺構【畦畔お よび導水路、沼地形 およびピット列(2)】	山茶碗類【碗・小皿】・伊勢型鍋
古代			灰釉陶器【碗・皿】
弥生時代後期			台付甕片など
縄文時代中期 ～弥生時代中期	II層下およびIII層上面	竪穴建物跡(19)・土坑 墓(4)・包含層	縄文土器【深鉢・注口土器】、弥生土器【壺・深鉢・甕】、石器【石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・剥片石核類・磨製石斧・有溝石錘・磨石・磨石類・石皿台石類】、石製品【石棒石刀類・岩偶岩版類】
縄文時代早期以前	V層直上	煙道付炉穴(1)・ 土坑群(3)	剥片

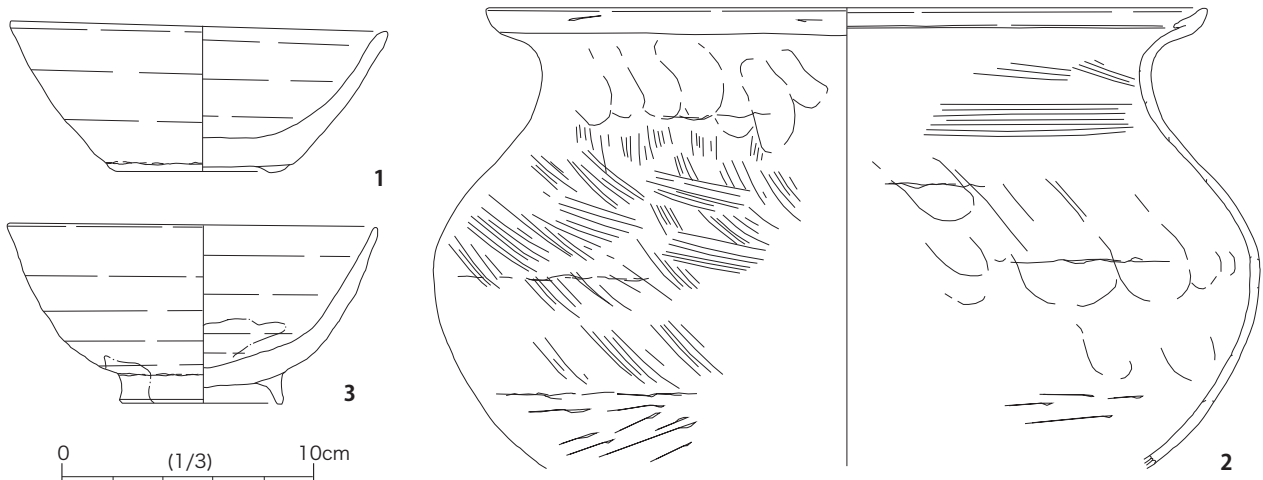


畦畔の検出状況(左:平面、右:平面と断面)

表土掘削を実施したところ、Ⅱ層下層からⅢ層直上に達したところで、安山岩剥片類の出土が、散在的ではあるものの広く確認することができた。さらにⅢ層としているにぶい黄褐色粘土・シルト層は遺跡内全体に安定的な広がりが認められることから、Ⅱ層下層・Ⅲ層直上を目安に調査開始面とした。Ⅱ層は攪拌された堆積層で、部分的に炭化物粒を多く含む。一部Ⅲ層に掘り込まれる形でⅡ層を確認できる部分があり、畦畔の形状を呈していることを確認した(上写真右)。以下、これら遺構を水田関連遺構として概要を述べる。

水田関連遺構

水田関連遺構が検出されたのは、調査区西半分から南側、さらには南東部分にかけてである。水田関連遺構は、Ⅱ層内での包含を主体としており、Ⅲ層直上では概ね擬似畦畔の検出を行うこととなった。水田関連遺構は、アゼおよび溝と、畦畔区画内に形成された作土で構成されている。アゼに囲われた区画は、一辺4mほどを主体とする小区画の形状を呈する。当地は緩やかではあるが地形の傾斜があることから、耕作地を造成するには、等高線に沿った小さい区画を基本とすることが、最も効率的であったと推測される。調査では、導水路と考えられる溝(014SD)が確認されている。この014SDは調査区北側では顕著に確認できるものの、南に進むに従ってこの流路自体を畦畔としての利用がなされていたようである。014SD内には144SKのような大きな落ち込みが見つかった。中からは片麻岩礫が多く出土していることから、水流を調整する施設であった可能性もある。



水田関連遺構出土遺物(1:山茶碗、2:伊勢型鍋、3:灰釉陶器 椀 S=1/3)



古代以降 遺構全体図 中世前半主体(S=1/600)

水田関連遺構の時代

水田関連遺構は部分的な補修・改変が継続して行われており、アゼ部分の土層断面を見ると、複数回にわたる造成が確認できる。このようなアゼ内から、山茶碗(37頁図の1)や土坑内(5140SK)に入れられた伊勢型鍋(2)の出土が確認されている。水田関連遺構の時期比定は容易ではないものの、まずはこれらの時代(鎌倉時代)の所産である可能性がある。B区では、これらの水田と重複する近世の水田跡(5282SX)が存在しているほか、灰釉陶器が多く出土していることから、時代の遡る水田遺構もあるかもしれない。(川添和暁)



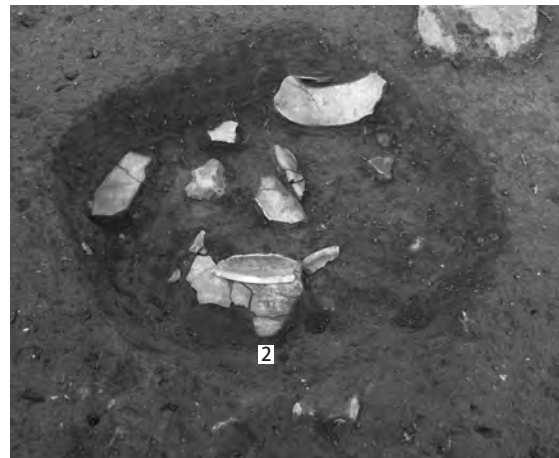
遺跡全景 A区水田関連遺構全体(南西より)



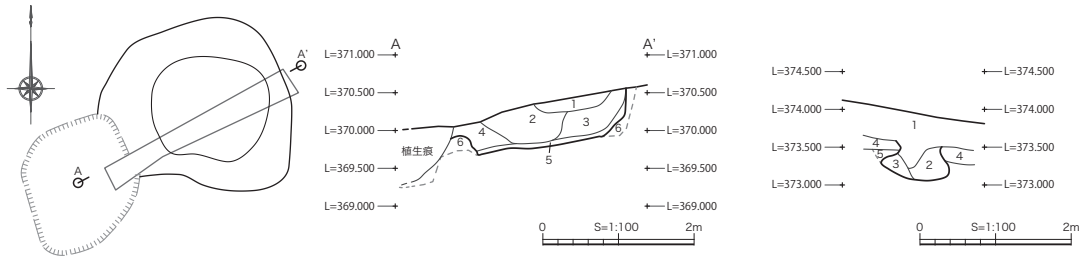
A区 水田関連遺構全景(北より)



畦畔部分出土山茶碗(南東より)



5140SK 伊勢型鍋出土状況(南より)



- 1 10YR3/2黒褐色シルト層 中稜の垂角礫を少量含む。炭化物を少量含む。
- 2 10YR3/2黒褐色シルト層 細礫含む。炭化物を非常に多く含む。焼土を極少量含む。
- 3 10YR3/2黒褐色シルト層 細礫少量含む。炭化物を含む。焼土を極少量含む。
- 4 10YR2/2黒褐色シルト層 暗褐色シルト小ブロックを含む。細礫少量含む。炭化物を少量含む。
- 5 10YR3/2黒褐色シルト層 黒色シルト小ブロックを含む。細礫含む。炭化物を多く含む。焼土を少量含む。
- 6 10YR2/1黒色シルト層

0245SY 平断面図(S=1/100)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト層 褐色シルト小ブロックを少量含む。細礫含む。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト層 褐色シルト小ブロックを少量含む。細礫多く含む。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト層 褐色シルト小ブロックを含む。細礫含む。中稜の垂角礫を含む。
- 4 10YR4/4褐色シルト層 黒褐色シルト大ブロックを多く含む。中稜の垂角礫を少量含む。
- 5 10YR4/6褐色細粒砂質シルト層 中稜を少量含む。

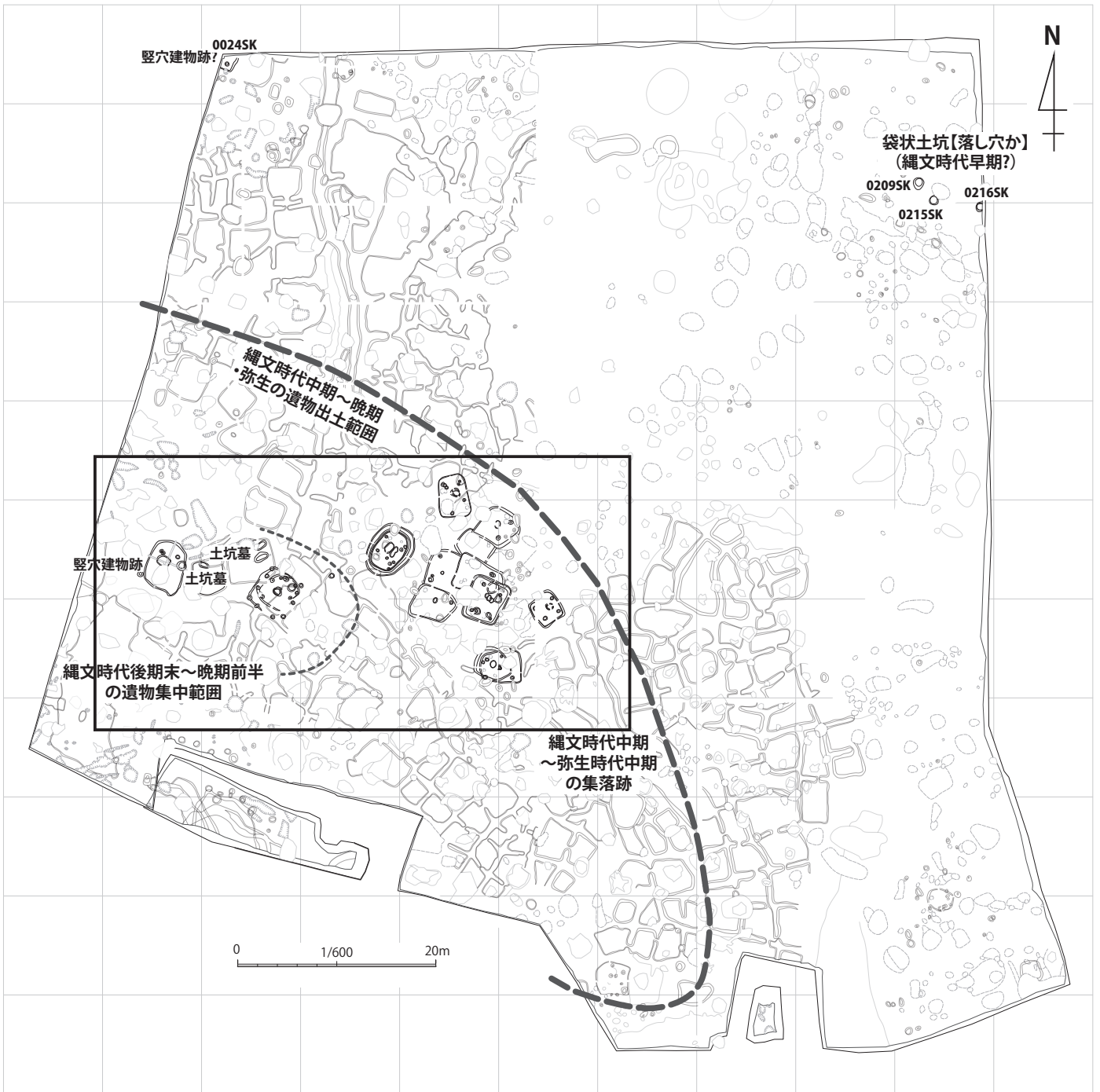
0216SK 断面図(S=1/100)

木炭窯

0245SYはB区北部の斜面地に位置し、多量の炭化物、焼土を埋土に含み、壁面に若干の被熱痕を持つ大型の土坑である。平面形状は直径約2.0～2.5mの不整な円形で、残存する深さは約60cm、遺構西側は植生痕によって破壊され、遺構上部も削平されている。出土遺物はなく、少数の炭化木材が出土するのみで、木炭窯としての機能が想定される。時期は不明であるが、近世後半以降のものと考えられる。

袋状土坑

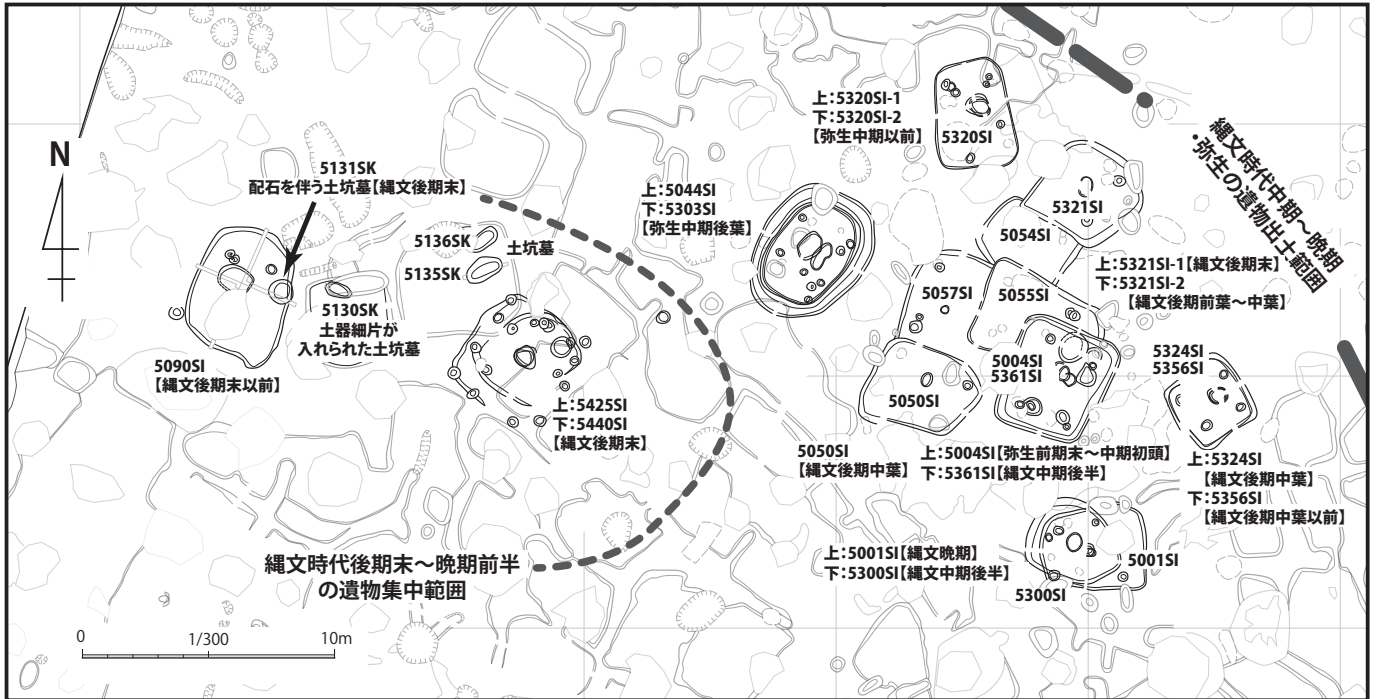
0209SK、0215SK、0216SKはB区北部の斜面地のうち、やや傾斜の緩い一帯に位置する袋状土坑である。検出面からの深さは0216SKで約50cmであり、形状から落とし穴などの機能が想定される。出土遺物はなく時期は不明であるが、縄文時代のものか。(河嶋優輝)



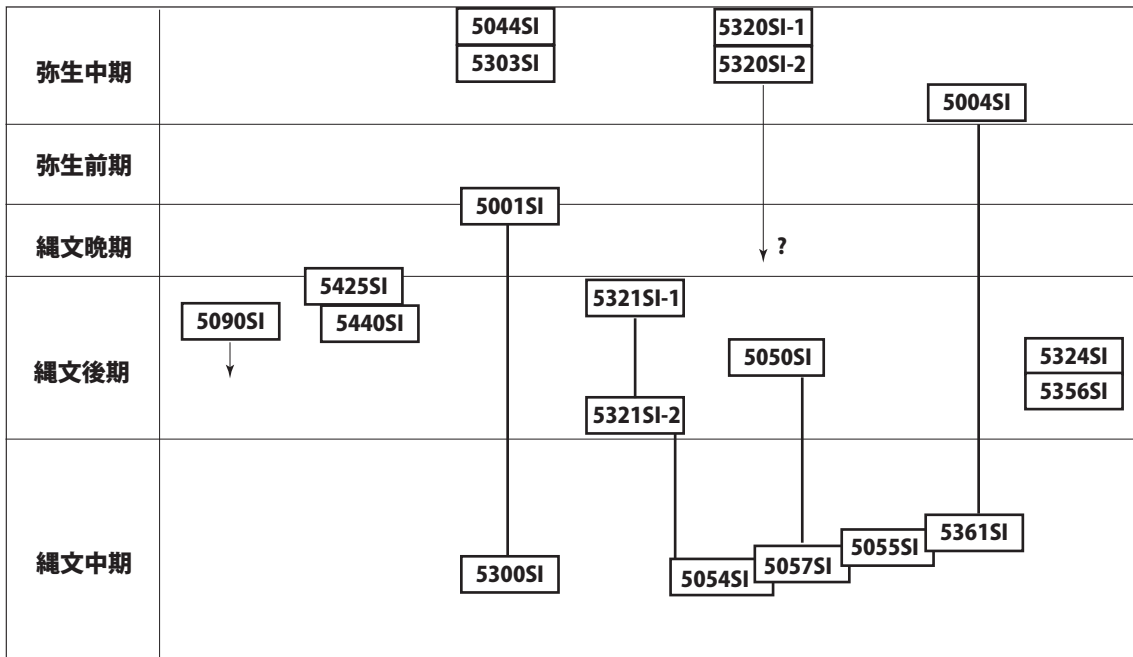
縄文時代・弥生時代 遺構全体図(S=1/600 枠内の拡大図は右頁上に掲載)

縄文時代・
弥生時代
の集落

調査区全体で、安山岩を主体とする剥片類の出土があるものの、遺跡範囲の南西側では、特に土器・石器が著しく出土した。調査区の中央では、I層(表土)を除去すると、II層が薄くすぐにIII層に達し、竪穴建物跡の集中を確認することができた。出土土器を見ると、縄文時代中期前半以降、弥生時代後期までの遺物が確認されたが、竪穴建物跡の集中地点では、縄文時代中期後半から弥生時代中期までの遺物が出土している。またより西側では、縄文時代後期末～晩期にかけての遺物が集中しており、II層下層に当該期の包含層が、耕



竪穴建物跡周辺詳細(S=1/300)



※太線および重なりは重複関係を、矢印は帰属時期が遡る可能性を示す。

竪穴建物跡形成時期および重複関係模式図

作土として攪拌されることなく残存していた。

竪穴建物跡は、同場所の重複も含めて、計19棟を確認した。二つの上図は平面的位置と、形成関係を示したものである。縄文時代中期後半から後期にかけてのものが多い一方で、5004SIのような弥生時代中期初頭、5044SI・5303SIのような弥生時代中期後葉に属する



竪穴建物跡群検出状況 5004SI付近(北から)



竪穴建物跡群完掘状況(北東から)



5425SI(南西から)



5131SK(南から)

ものもあり、長い時代にわたって、居住場所として選地されていた様子を見ることができ
る。確認できた竪穴建物跡からみて、当時は一時期に1棟あるいは2棟程度の集落であつた
と推定される。

なかでも最も内容が充実しているのは、縄文時代後期末から晩期であつた。竪穴建物跡
のほか、埋葬遺構や包含層の形成(送り場・捨て場)の形跡が認められる。この包含層からは、
土器片のほか、石棒石刀類や岩偶岩版類の出土も認められた。竪穴建物跡は、5425SIで唯
一石囲炉跡を確認し、その他は地床炉跡、あるいは石囲炉の掘り込み土坑が検出されたの
みであつた。埋葬遺構は4基見つかっている。5131SKは埋土上位などに配石行為が実施さ
れた土坑墓で、埋土内から岩偶岩版類片と磨製石斧が出土した。一方、5130SKは土器の大
型破片のみならず、細片化した土器片が埋土に多数含まれていた土坑墓である。いずれの
遺構からも骨片などの出土は確認できなかった。

出土遺物

出土遺物には、土器・陶器・石器・石製品がある。縄文土器には、深鉢のほか注口土器の
出土も確認されている。注口部の出土は目立たなく、壺形を呈する口縁部片や胴部片が多
く出土している。弥生土器では、壺・深鉢のほか、台付甕の出土もある。石器には、石鏃・
石匙・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・剥片石核類・磨製石斧・有溝石錘・磨石敲石類・
石皿台石類がある。特に、調査区全体から出土する安山岩は、境川河床で採取されるもの
で、これまでの調査でも、打製石斧・刃器・礫器などの大型の打製石器を対象とした石材
として集中して使用されたものである。大崎遺跡でも、岩偶岩版類の出土が2点確認された。



5004SI出土土器(弥生時代前期末～中期初頭)



5004SI周辺出土土器(弥生時代中期)



5131SK出土 磨製石斧(縄文時代後期末)

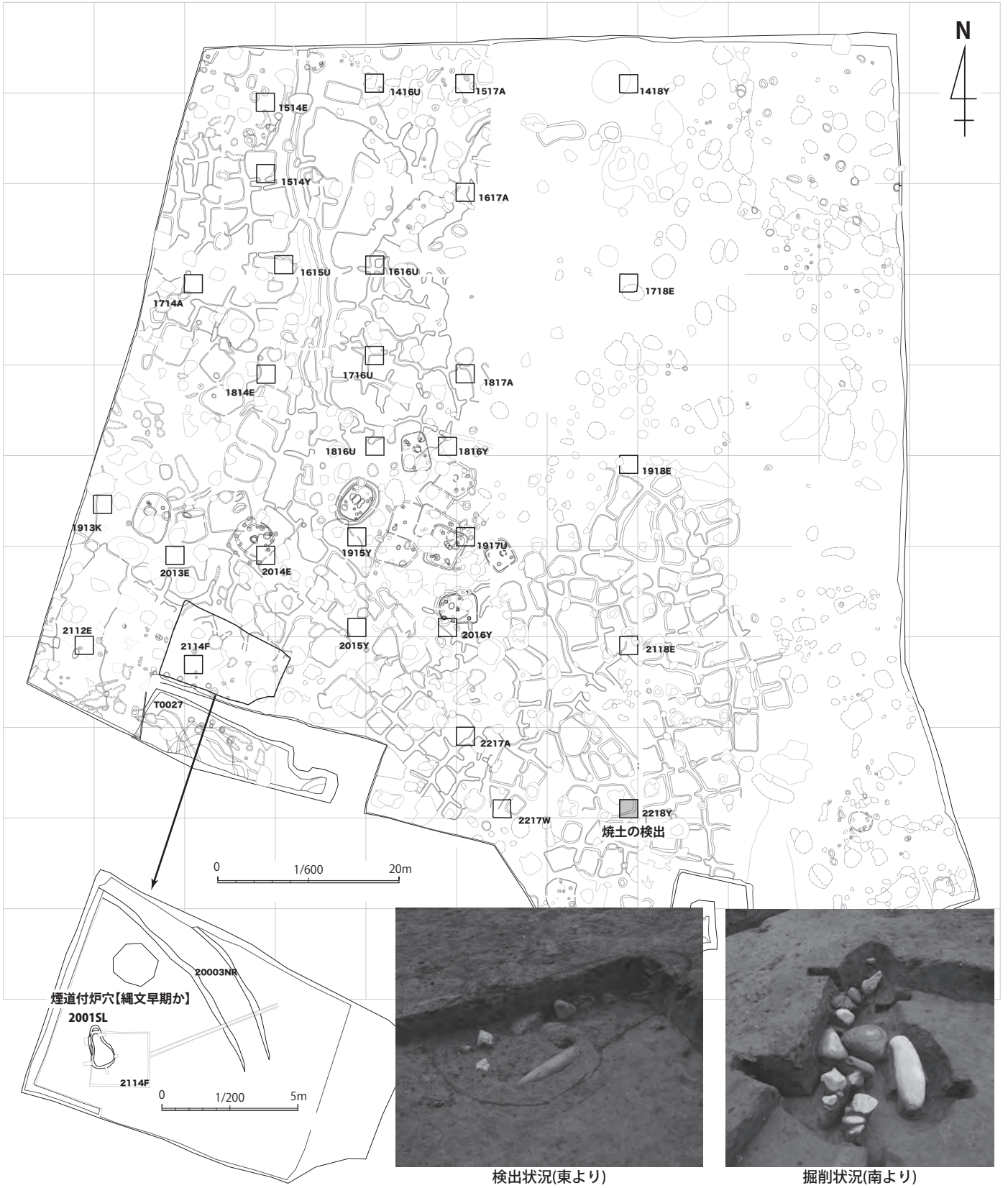


岩偶岩版類(縄文時代後期末～晩期)

2点とも砂岩あるいは凝灰質砂岩製で、破片での出土である。注目すべきはそのうちの1点は5131SKという配石を伴う土坑墓の埋土から出土しており、この岩偶岩版類の性格を考える好資料となろう。

下層
確認調査

大崎遺跡の今年度の調査は、Ⅲ層(にぶい黄褐色粘土・シルト層)上面までの調査となった。さらに下層に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために、2m四方の国土座標を用いたグリッドを設定して、Ⅲ層の堆積が認められる範囲を掘削した。2118Yグリッドでは焼土を検出したほか、2114Fグリッド付近では煙道付炉跡(2001SL)を、Ⅴ層直上で検出した。2001SLは長軸3m強の平面プラン水滴状を呈する遺構で、もともとは二つの土坑を連結させてトンネル状の炉穴として機能していたものが、その後、礫を入れて改修して使用されたようである。遺構の性格などから縄文時代早期前半に属するものと思われるが、土器の出土は確認できなかった。このように特に遺跡南端では、Ⅲ層下に縄文時代早期以前の埋蔵文化財が包含されている可能性が高いことが推定された。周囲からは、溶結凝灰岩による剥片の出土も散発的に認められることから、今後も注意深い調査が必要とされる所である。
(川添和暁)



下層確認グリッド位置と煙道付炉穴(20015L)